様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０４１３３

研究課題名（和文）信頼関係構築に向けたプライマリ・ケア診療の会話分析的研究

研究課題名（英文）Conversation analytical research on decision-making process with uncertainty during medical consultations

研究代表者
川島　理恵（KAWASHIMA, Michie）

京都産業大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：００７０６８２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、主にプライマリ・ケア診療において医師と患者がどのように信頼関係を構築し診療をスムーズに進めているのかについて検討を行った．信頼関係が危うくなる場面は診療中様々に訪れる．例えば中々改善されない症状について患者がなんらかの不満を吐露したり、医師が提案した治療方針に患者が同意しない場面である．そうした場合、患者の思いを汲み取りつつ、医師は様々な相互行為的な仕掛けを使って患者の立場を考慮していることを全面に示すことがあった．その上で、医師としての提案を形作っていた．本研究は医師と患者がそれぞれの立場からの意見を共有し、交渉しつつ治療方針を決定しているのかを明らかにした．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的な意義は、会話分析という社会学的な手法を用いることでプライマリ・ケアに置ける関係構築のプロセスを実証的に検証し明らかにしたところにある．これまで事例報告としてしか扱われてこなかった信頼を構築するプロセスを経験的なデータ収集を行うことで、蓄積したデータの中から具体的な手順として記述することに成功した．
また社会的意義は、まさにその具体性にある．実証的なデータによる知見は、日常的に医師や患者に経験されながらも見過ごされてきた部分である．「当たり前のこと」を如実に明らかにすることで、今後の関係構築一助となりえる知見を提供した．

研究成果の概要（英文）：This study focuses on patient-doctor relationship, especially how doctors and patients are forming a trustable relationship during primary care consultations. The relationship can be endangered in many different occasions. For example, patients often display complains about previous medical care or resist against a doctor's proposal. In those cases, doctors often show consideration for patients' orientation and attempt to resolve the different orientations using various kinds of interactional resources. This study revealed some of these interactional resources through which doctors and patients share their opinions and accomplish consent among patients and doctors.

研究分野：医療社会学

キーワード：会話分析　ヘルスコミュニケーション　医療社会学　意思決定過程

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
昨今の医療改革では，プライマリ・ケアがその重要性を増している．この背景は，諸外国においてプライマリ・ケアを窓口とし専門医への紹介を行う医療システムが発達し，日本においても同様の制度の普及が進められていることである．患者が安心して医療を享受できるシステムを構築するために，日常的に患者と接し，信頼関係を構築していけるプライマリ・ケアの医師が担う役割が高まっている．本研究の重要な学術的背景は，患者との関係性の構築が必須であるプライマリ・ケア診療の研究が，欧米において発展してきたことにある．特に会話分析を使った研究は，患者から必要な情報を引き出すための質問デザイン，触診の方法，スムーズな告知の方法，薬や治療方針の交渉など，診療全体に渡り包括的な知見を提示してきた．これらの研究結果は，欧米の医学部におけるコミュニケーション教育の内容に反映されている．申請者は， 2015 年にそれらの研究の集大成とも言える研究書の翻訳（ 2015 年度 ①）を行い欧米での研究結果を紹介した．最近では，中国や台湾などアジア圏でも，会話分析の視点からプライマリ・ケア診療の研究が始められている（Wu2015）．さらに， Stivers を始めとする研究者は，プライマリ・ケアデータをもとに国際的な比較研究を計量的に進めている（Stivers & Heritage, forthcoming).しかし，驚くべきことに日本においては，プライマリ・ケアの研究は皆無である．国内の会話分析研究者がこれまで対象としてきたのは，癌治療，精神医療，女性医療，救命医療など特殊なものが多い．本研究は，こうした国際的な研究動向に対し，日本でのプライマリ・ケアにおけるコミュニケーション研究の基軸を作成し，国際的な比較研究への参画を目指した．

２．研究の目的
本研究の目的は３つある．まず，近年の専門医制度改革で注目されるプライマリ・ケアに焦点をあて，診療コミュニケーションを会話分析の方法論で分析することによって，医師が患者との信頼関係を構築する過程を質的に解明する．次に，質的な分析をベースとしたコーディングスキームを作成し，それをもとに，医師が信頼関係を構築する手法に応じて患者からの反応がどのように異なるかなどの相関関係を計量的に分析し，その結果を海外のプライマリ・ケア研究の結果と照らし合わせることで，医師 –患者間の信頼関係が構築されるプロセスの社会文化的相違を明らかにする．さらに，日本の医療制度や文化的土壌をふまえたとき，どんな手法が信頼構築に有効であるかについて，プライマリ・ケア現場に具体的な提言として還元することを目指した．

３．研究の方法
初年度及び次年度は、プライマリ・ケア現場において約 60～100 件の映像・録音のデータ収集を行った． 撮影したデータはすぐに文字化し、 (a)患者からの問題提示 (b)医師からの質問デザイン (c)意思決定過程の 3 つの分析軸を中心に分析し、特徴となる会話パターンを抽出する．次年度には、質的分析を進めた． 次々年度及び最終年度は、抽出された会話パターンを基にコーディングスキームを作成し、データ全体における当該パターンの頻度・ほかのパターンとの相関など計量的な検討を行った．その結果を海外のプライマリ・ケア研究結果と比較検討した．

４．研究成果
特に日本のプライマリ・ケアにおける診療場面の分析に注力した． 診療場面における患者の基本的課題の1つは，受診の正当性を示すことである．患者が主訴に関してすでに他の医療機関を受診したあとで現在の受診に至っている場合，その先行する診療を担当した医師に関する不満は，さらなる医療ケアの必要性を伝える点で受診の正当化の重要な手立てとなりうる．だが，そうした不満は受け手の同業者に向けられている点で共感を得にくく，話し手自身に関する負の評価を喚起する可能性もあるデリケートな行為である．このジレンマが相互行為の中でどのように対処されているかを，医学的に説明のつかない症状を持つ患者の事例を中心として，会話分析の視点から考察した．その結果，患者は診療の中でいつどのように不満を述べるか，あるいは自分の不本意な経験の報告を不満としてデザインするかどうかを慎重に選択することによって，ジレンマに対処し，自分が理性的患者であるという自己呈示を維持することで，受診の正当性を高めていることを示した．以上の内容は、社会言語科学22巻、2号に研究論文として掲載された．

また総合診療科の特色に着目した分析を進めた．日本の医療システムの特徴として高い柔軟性が挙げられ、その最たるものがオープンアクセスと言える(OECD,2014)．患者は自由にどの診療科にかかるのかを選択でき、脳外科といったかなり専門的な診療科でさえ自身の決定によってかかることが可能である．しかし、こうした医療システムにおいて十分な自由を享受しているように見える患者は、同時に最適な選択を行う責任を負うことになる．またこのシステムの特性上、大病院に患者が集中するのを避けることはできない．そのため大学病院の外来では、軽症患者の病院へのアクセスを制限するためのgate keepingが必要となる．総合診療科において医師が担うgatekeeping workに着目した．医師が「様子見」や「かかりつけ医の受診」など、今後継続して大学病院では治療を行わないことを勧める際、患者の抵抗をどのように扱い、治療方針の話し合いを行なっているのかを分析した．結果としては、医師は医療の

resource stewardとしての立場を保ちながら、patient advocateとして患者の意思を尊重するために様々な工夫を行っていた．それは時には譲歩を意味するものもあれば、患者にローカルな医療システムの使用についての教示を行なったり、他のクリニックを利用する患者の利点を強調したりするものをあった．これらの分析については、前述のTanya StiversやWuなどとの国際比較研究の内容を定期的にオンライン研究会などで議論を進め、彼らと共同し現在、Social Science and Medicine特集号に投稿中である．

また香港大の Olga Zayts らと共同して Routledge 出版において Routledge Series on Language, Health and Culture のシリーズに Language, Health and Culture: Problematizing ‘Global Centres’ and ‘Peripheries’ in Healthcare Communication Research という本の出版を進めている．ここでは、日本の医療における患者と医師との信頼関係の基盤となる意思決定過程についての章を担当している．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 串田秀也、川島理恵、阿部哲也	４．巻 22(2)
２．論文標題 先行医師への不満と受診の正当化―医学的に説明のつかない症状の事例を中心に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会言語科学	６．最初と最後の頁 46-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.22.2_46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Michie Kawashima	４．巻 21(2)
２．論文標題 'Mitori' practices at a Japanese Hospital: Interactional analysis of the processes of death and dying in Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Discourse Studies	６．最初と最後の頁 159-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11777/1461445618802652	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島理恵，依田育士，黒嶋智美，太田祥一，行岡哲男	４．巻 22-2
２．論文標題 トリアージの効率化に向けた社会学と高額の融合研究	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Japanese Journal of Disaster Medicine	６．最初と最後の頁 189 -198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 串田 秀也、川島 理恵、阿部 哲也	４．巻 22
２．論文標題 先行医師への不満と受診の正当化―医学的に説明のつかない症状の事例を中心に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会言語科学	６．最初と最後の頁 46-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.22.2_46	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kushida Shuya、Kawashima Michie、Abe Tetsuya	4．巻 265
2．論文標題 Why this clinic now? A context-sensitive aspect of accounting for visits	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Social Science & Medicine	6．最初と最後の頁 113278-113278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.socscimed.2020.113278	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Michie Kawashima
2．発表標題 How to make unacceptable choice for a patient acceptable?
3．学会等名 International Conference of Pragmatics, Hong Kong（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Michie Kawashima
2．発表標題 Patient's agency and responsibility in presenting a reason for visits
3．学会等名 International Conference of Conversation Analysis（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Michie Kawashima, Shuya Kushida, Tetsuya Abe
2．発表標題 Accounting for visits under a free acess system in Japanese Primary Care
3．学会等名 6th International Meeting on Conversation Analysis and Clinical Encounters（国際学会）
4．発表年 2017年

１．発表者名 Michie Kawashima & Shuya Kushida
２．発表標題 Adherence for appropriate utilization of health care in Japan; conversation approach to telling of "other" health care experiences
３．学会等名 18th Annual meeting of National Communication Association（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Michie Kawashima, Ikushi Yoda, Satomi Kuroshima, Shoich Ota
２．発表標題 Collaborative Study on Effectiveness of Triage During Medical Emergency Drill Using Conversation and Trajectory Analysis
３．学会等名 Asia Pacific Conference on Disaster Medicine（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 川島理恵
２．発表標題 子育ての会話分析ー大人と子供の「責任」はどう育つかー
３．学会等名 第２７回日本発達心理学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 川島理恵
２．発表標題 会話分析と動線分析を使用したトリアージに関する実証研究
３．学会等名 第２２回日本集団災害医学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Michie Kawashima
２．発表標題 Dealing with patient reluctance in difficult decision-making process
３．学会等名 The 3rd International E-symposium on Communication in Health Care（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Michie Kawashima, Douglas Maynard	４．発行年 2019年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 24
３．書名 The Social Organization of Echolalia in Clinical Encounters Involving a Child Diagnosed with Autism Spectrum Disorder, in Children and Mental Health Talk	

１．著者名 Akira Takada and Michie Kawashima	４．発行年 2017年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 211-255
３．書名 Relating with an Unborn Baby: Expectant Mothers Socializing Their Toddlers in Japanese Families in "Children's Knowledge-in-Interaction" edited by Bateman& Church	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	阿部　哲也 (ABE Tetsuya) (20411506)	関西医科大学・医学部・准教授 (34417)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Workshop with Professor Mondada on Multimodality in Interaction	2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Cologne University	DUISBURG-ESSEN University		
Switzland	University of Basel			
USA	University of California, Los Angeles			
中国	University of Hong Kong			